

## ヘブル人への手紙6章「希望の中での前進」

### 1A 鈍い心の危険 1-8

#### 1B 成熟への前進 1-3

#### 2B 墮落した者の滅び 4-8

### 2A かつて示した愛の働き 9-12

### 3A 神の約束と誓い 13-20

#### 1B 忍耐の末に得た約束 13-18

#### 2B 希望による守り 19-20

## 本文

ヘブル人への手紙 6 章を開いてください。ヘブル書の著者は、イエスが神の右の座におられる大祭司であることを伝えるために、メルキゼデクという人物を紹介しようとしています。けれども、それができないと言っています。それは、「聞くことに対して鈍くなっているから」と言っています(5:11)。ユダヤ人であって、キリストを信じる者として、圧迫を受けて、苦しみにあっているので、キリストを信じることに熱心にならず、それなりにやっつけようという、霊的に後退している状態にありました。そして、ユダヤ人が行っている、神殿礼拝の儀式を守っていることに満足するようになってきていました。それに対する警告を、著者はしています。

私たち異邦人ももちろんのこと、この危機があります。キリストとの生きた関係を保つためには、あたかも川上りをする鮭のように、世の流れに抗わないといけません。抗うことによって、霊的に前進できます。ところが、その圧迫や圧力を受けている中で、いつものやっつけようをやっつけられればよいや、という怠け心が入ってきてしまいます。キリストを信じることに熱心にならず、適当にやっつけられればよいや、ということになります。そしてついに、キリストを信じるどころから離れて、イエス様に思いを寄せることはなく、世を愛して生きることさえあります。そのように、霊的に後退している時は、みことばが語られても、聞く力がなくなっているでしょう。そのことを、今、ヘブル書の著者は話しているのです。年数からすれば教師になっていなければならないのに、教えの初歩を学ばないさないといけない状態にあります、と言っています。

### 1A 鈍い心の危険 1-8

そこで6章から、成熟に向かって前に進まないといけないと、強く勧めています。

#### 1B 成熟への前進 1-3

<sup>1</sup> ですから私たちは、キリストについての初歩の教えを後にして、成熟を目指して進むではありませんか。死んだ行いからの回心、神に対する信仰、<sup>2</sup> きよめの洗いについての教えと手を置く儀式、

死者の復活と永遠のさばきなど、基礎的なことをもう一度やり直したりしないようにしましょう。<sup>3</sup> 神が許されるなら、先に進みましょう。

前回、少しお話ししましたが、ここに書いてあることは、私たちが受ける初歩の教えと少し異なる面があります。ユダヤ人の信者にとっては初歩の教えですが、異邦人である私たちにとっては、深い内容であったりします。なぜなら、これらはユダヤ教のしきたりや教えの中にも見出せるものであり、彼らにとってはよく知られているものだからです。

死んだ行いからの回心や、神に対する信仰は、ユダヤ教で教えられています。きよめの洗いについてですが、彼らはミクベという全身水に浸かる水槽があり、そこに入って出てきます。これを、聖書の他の訳ではバプテスマと訳していますが、ユダヤ人たちにとってバプテスマは、真新しいことでは全くなく、いつも行っていたことでした。イエスの名につくバプテスマが、真新しいことだったので。私たちは、水の中に入ること自体が、真新しいことですね。そして、手を置く儀式も、私たちの習慣にありませんが、ユダヤ人たちにとっては、普通に行われていました。そして、死者の復活と永遠のさばきについて、旧約聖書に書かれていることですし、イエス様がよみがえられたことによって、この方がメシアであるという確証を得たのです。

これらのことは、基礎的な教えであって、再びやり直さないといけないということは、霊的な成長が止まってしまっている状態であることを示しています。いや、もっと危険な状態であると言えます。なぜなら、これらはユダヤ教の中にあるもので、彼らはキリストを告白せずに、同じことをやり続けることができるからです。ユダヤ教の中に埋没することができるのです。

これを我々、異邦人にあてはめるなら、いつの間にか世の教えや慣わしに、埋没することです。キリストあつての平和を私たちは知っています。ところが、平和についての教えだけになったらどうでしょうか？ 神の平安を求めているのはいいのですが、ただ落ち着いていることが目的でしょうか？ キリストの愛を私たちは知っています。ところが、キリストがなくなって、愛だけが突出して、その話をしていることはないでしょうか？ キリストあつての全てなのですが、その全てがキリスト抜きに語られていくときに、それは抜け殻であって、中身のない空しいものです。けれども、自分自身は大丈夫だと思って、偽ってしまいます。いつの間にか、キリスト抜きの他のものの制度や習慣の中に、安住してしまうのです。

## 2B 墮落した者の滅び 4-8

そこで、信仰から離れていってしまう人について、警告を語ります。

<sup>4</sup> 一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかる者となって、<sup>5</sup> 神のすばらしいみことばと、来たるべき世の力を味わったうえで、<sup>6</sup> 墮落してしまうなら、そういう人たちをもう一度悔い改

めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、さらしものにする者たちだからです。

使徒の働きに出てくる信者たち、特にユダヤ人たちの間での神の働きには、目覚ましいものがありました。聖霊が力強く臨まれ、大胆にみことばを語っていました。そのような中で、ここに列挙されているような、目覚ましい霊的な体験をした人たちが多かったのでしょう。まず、「光に照らされ」とありますが、パウロが、ダマスコに行く途上で、光に照らされ、イエス様に会いました。物理的な光以上に、霊的に、心と思いが開かれる光であります。そして、聖霊にあずかるのですが、聖霊のバプテスマの約束が与えられ、人々は聖霊を受けていましたね。それから、神のすばらしい、みことばも語られました。そして、「来たるべき世の力」というのは、神の国です。御霊によって、神の国にある力を前もって味わうことができます。

これらの経験をしているのに、それでも「墮落してしまうなら」と言っています。墮落というのは、ここで言っているのは、キリストご自身への信仰から離れるということです。イエスの名は唱えているのかもしれませんが、けれども、そこにはイエスへの信頼がありません。イエスに対する生きた信頼のない状態というのが、これらの目覚ましい霊的体験を経ても、起こりうることなのです。午前礼拝でも話しましたように、体験によっては、果たしてその人が救われているのか？ということ、必ずしも保障できないということを話しました。

そして、「もう一度悔い改めに立ち返らせることはできません」というのは、キリストから離れている中で、悔い改めといったところで、全く意味がないということです。ユダヤ人たちは、キリストへの信仰から離れても、悔い改めることができました。神に対する信仰はあるからです。けれども、キリストに向かう悔い改めではなく、ユダヤ教の中で悔い改めをしたところで、神に立ち返ることは、本当の意味ではできていません。

同じように、私たちがイエス様を求めるといふことなしに、自分は反省した、悔い改めたということ、を話したところで、それが神への立ち返りにはならないのです。分かりやすいのが、イスカリオテのユダです。ペテロと比べてください。ユダもペテロも、イエス様を裏切りました。ユダは、イエス様を売り渡し、ペテロはイエス様を知らないと言って、呪いました。しかし、ペテロは激しく泣き、イエス様が十字架につけられ、墓に葬られたその墓に遺体がないことを聞いたら、すぐに出ていきました。イエス様に希望を置いていたのです。イスカリオテのユダは、どうですか？彼は、「無実の人の血を売って罪を犯しました。」と、祭司長や長老に言ったのです(マタイ 27:4)。彼は、思い直しました。しかし、イエスのことを他人のように「無実の人」とだけ言って、自分とは何の関係もない人として語っています。イエスから離れたら、反省しても、後悔しても、悔い改めに立ち返ることなどできないのです。

そして、著者は続けて、「自分で神の子をもう一度十字架にかけて、さらしものにする」ということだと言っています。ヘブル書を読み進めると、どんどん見えてくるのは、キリストは、ただ一度、罪の贖いのために十字架にかけられたのであって、それが究極の救いであり、永遠の救いをもたらすというものです。しかし、キリストではない方法で、救いを求めるということは、そのただ一度だけの十字架の贖いを否むこととなります。それで、イエスに恥を再び晒すようなことをするのだと警告しているのです。

当時の十字架は、恥さらしの意味が多分にあります。人々の前で、さらし者にして、卑しめるのです。イエス様にあって、私たちも苦しみにあい、恥を受けます。しかし、その時にキリストの栄光が現れるのです。しかし、それを避けるためにイエス様を告白しないのであれば、イエス様が辱められるのです。

<sup>7</sup> たびたび降り注ぐ雨を吸い込んで、耕す人たちに有用な作物を生じる土地は、神の祝福にあずかりますが、<sup>8</sup> 茨やあざみを生えさせる土地は無用で、やがてのろわれ、最後は焼かれてしまうのです。

イエス様が、種を蒔かれた譬えを語られましたね。そこで、岩地に蒔かれた種は、すぐに芽は出しても、迫害や試練があるとすぐにしぼんでしまいます。偽預言者についても、実によって見分けることができると言われていました。また、ぶどうの木につながって、実を多く結ぶか、それとも、キリストから離れて、火で燃やされる枝にしか過ぎなくなるのか？という問いがありました。それがここに書かれていることです。キリストにつながっているならば、必ず実が結ばれます。人が、キリストにつながっているかどうかは、その人の実を見れば明らかです。

## **2A かつて示した愛の働き 9-12**

このように著者は語りましたが、彼らがまだ、墮落しているというわけではありませんでした。一部にいたかもしれませんが、多くはその危険はあっても、墮落しているところまでは行っていません。しかし、自分たちのしていることが、何か報われていないと感じて、信仰の熱心さから離れかけていることは確かでした。そこで、次の励ましを与えます。

<sup>9</sup> だが、愛する者たち。私たちはこのように言うてはいますが、あなたがたについては、もっと良いこと、救いにつながることを確信しています。<sup>10</sup> 神は不公平な方ではありませんから、あなたがたの働きや愛を忘れたりなさいません。あなたがたは、これまで聖徒たちに仕え、今も仕えることによって、神の御名のために愛を示しました。

彼らは、愛の行いに優れていました。聖徒たちに仕えていました。今も仕えています。神の御名のゆえに愛を示していました。それこそが、彼らが救われている証拠です。神は、ご自分の恵みに

よって、信仰を通して救われますが、それは、神の用意しておられる良い行いをするためであり、救われた人は、その救いがその人の愛の行いを通して現れるのです。

「神は不公平な方ではありません」と言っていますね。なぜかという、自分たちの働きや愛について、その報いが目で見える形で現れないからです。誰の目にも留められていないように感じます。イエス様が、施しをするときは、「右の手がしていることを左の手に知られないようにしなさい。」と言われましたね(マタイ 6:3)。つまり、主の名による良い行いは、主ご自身が見ておられるけれども、必ずしも他の人たちには知られるものではないのです。だから、愛の行いをして、徒労に終わるようなことが多々あり、むしろ迫害を受けるようなことになることが、しばしばあります。しかし神は、不公平な方ではないのです。主は、必ずこれらの行いに報いてくださいます。

この箇所は、実は私個人にとってとても思い出深いことばです。アメリカから日本に帰って、すぐに聖書の学び会を自宅で開きました。一人を除いては、だれも定着しませんでした。周囲に伝道のトラクトを配っていました。救われる人はいません。英語教室をしましたが、一度来た若い女性が、電話越しでわざとらしく咳をして、教室に来ないことを告げました。宗教関係だから怖い、離れたいということがありありでした。いろんな辛い体験をしたときに、英語でニュースレターを書いていましたが、落胆して、弱音を少し吐きました。そこで、私がかつてカルバリー・コスタメサのスクール・オブ・ミニストリーの教師の一人が、メールでこの箇所を送ってきてくれたのです。

教会で反対者に対処しているテモテに対して、パウロがこう励ましています。「5:24-25 ある人たちの罪は、さばきを受ける前から明らかですが、ほかの人たちの罪は後で明らかになります。同じように、良い行いも明らかですが、そうでない場合でも、隠れたままではあることはありません。」良い行いが明らかにならなくても、隠れたままではあることはいけません。

<sup>11</sup> 私たちが切望するのは、あなたが一人ひとりが同じ熱心さを示して、最後まで私たちの希望について十分な確信を持ち続け、<sup>12</sup> その結果、怠け者とならずに、信仰と忍耐によって約束のものを受け継ぐ人たちに倣う者となることです。

ここです、彼らの大きな問題は、熱心さがなくなってしまったこと。希望を初めは抱いていたが、その確信を揺るがせて、霊的に怠けてしまっていることでした。私たちも、霊的に疲れて、罪に対して妥協的になり、主のことについて、熱心でなくなることはないでしょうか？後で、ヘブル書の著者は、このように勧めています。「12:3-4 あなたがたは、罪人たちの、ご自分に対するこのような反抗を耐え忍ばれた方のことを考えなさい。あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないようにするためです。あなたがたは、罪と戦って、まだ血を流すまで抵抗したことはありません。」

ここで、アフリカのコンゴのエンドレラという村で、宣教の働きをして実が結ばれないため、神を呪

って生きてきた宣教師のお話をしたいと思います。スウェーデン人のフラッド夫婦は、その村で伝道を試みるも、村長が接触を許さず、少し離れたところに小屋を建てました。唯一、接触を許されていたのは、食べ物を売りに来た少年です。彼にイエス様を伝えて、救われました。けれども、他に何も励まされることはありませんでした。奥さんが女の子が生まれるも、マラリアによって体が弱っていたので、間もなくして死んでしまいました。その時に、夫のデビッドさんは、言いようもない神への怒りがこみ上げました。そして娘さんを他の宣教師夫婦に託しました。

その娘さんが、アメリカ人夫婦に引き取られ、彼女はしっかりと信仰を持ち、聖書学校にまで行きました。アイナさんと言います。彼女は海外宣教の雑誌に、エンドラという村について書かれてあるのを見ました。立派な学校が建設され、そこにいる六百人の生徒は全員キリスト者になっています。その創立者は村長も信仰に導き、また自分の教団も作っています。十万人もの信者になっています。そして、彼を導いた宣教師の墓石の写真もありました。なんと、自分の生みの母親、スヴェー・フラッドという名だったのです。

それで、彼女は父親のことを調べ、まだ生きていたことが分かったので、スウェーデンに飛びました。父親フラッドさんは再婚していて、四人の子供がいました。しかし彼の家には、ルールがありました。「神の名を口にしてはならない。」というものです。アルコール依存症になっていて、脳卒中で寝たきりでした。会いたいと異母兄弟の方々に話したら、「会っていいけれども、「神」の言葉を聞くだけで激怒することを忘れないでください。」と言われました。そして、自分が娘アイナであることを告げると、フラッド氏は泣いて、平謝りしました。娘を置いて、自国に戻ってしまったからです。

彼女は、「大丈夫です、神さまが守ってくださいました。」と言ったら、体が硬直して、顔を壁に向けて、「神が我々を見捨てた。神のせいで、人生がめちゃくちゃにされたのだ。」と言いました。そこでアイナさんは、お父さんがアフリカに行ったことは決して無駄ではなかった、と言って、お父さんが導いた少年が、学校を設立し、六百人の学生がみな信仰を持ち、村長も信仰を持ち、十万人もの教団になっている。イエス様は、お父様を見捨てたりしていないと訴えました。すると、フラッドさんは、アイナさんをじっと見つめ、堅くなっていた体がだんだんほぐれました。五十年ぶりに、神に対して心を開いて、悔い改めたのです。そして、その数週間後に、天に召されたのです。<sup>1</sup>

これが、まさに信仰の戦いに疲れ果て、世の流れの中に身を任せただけの一例です。しかし、神は真実な方です。その希望は失望に終わっていなかったのを知り、彼は悔い改めることができました。

彼と同じように信仰の格闘をした、先人がいます。アブラハムです。「**倣う者となる**」とありますが、これは、次に出てくるアブラハムの生涯のことで、彼の生涯が、信仰と忍耐の結果、主の約束が誓いをもって確認されました。

---

<sup>1</sup> 「「セカンドチャンス」は本当にあるのか」ウィリアム・ウッド著 いのちのことば社

### 3A 神の約束と誓い 13-20

#### 1B 忍耐の末に得た約束 13-18

<sup>13</sup> 神は、アブラハムに約束する際、ご自分より大いなるものにかけて誓うことができなかつたので、ご自分にかけて誓い、<sup>14</sup>「確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたを大いに増やす」と言われました。<sup>15</sup>このようにして、アブラハムは忍耐の末に約束のものを得たのです。

午前礼拝でお話した通り、彼はカルデア人のウルという町にいましたが、その父の故郷から離れて、主の示す地に来ました。その時は七十五歳でした。そして、シェケムのモレの榎の木があるところで、祭壇を築きました。「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える。」と約束されたのです(創世 12:7)。約束は受け取ったものの、その間にいろいろなことが起こりました。飢饉が起こり、エジプトに下りました。ロトと別れて、彼はソドムの方に行きました。主は彼に語りかけましたが、自分に、子孫どころか、一人の息子も与えられていないことを訴えています。アブラハムが 85 歳ぐらゐの時に、エジプトにいた時に得た女奴隷ハガルを通して、イシュマエルを生みました。しかし、99 歳の時に、イシュマエルが約束の子ではない、サラが産むのだと言われました。そして彼が 100 歳の時に、イサクが生まれました。サラは 90 歳でした。

これで安泰と思いきや、なんとイサクが十代であったであろう時に、「あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして、わたしがあなたに告げる一つの山の上で、彼を全焼のささげ物として献げなさい。」と命じられます(22:2)。彼はそのまま従うのです。その姿は、疑うことがなかったことが分かります。そして、イサクを縛って祭壇に乗せて、刃物をとって彼を屠ろうとした時に、主の使いが止めました。そして、ここに書いてある、「確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたを大いに増やす」と主が言われたのです。これが、ここに書いてある、「忍耐の末に約束のものを得た」ということです。

みなさんも、信仰の旅路の中で、信じていることの報いが全く見えないと感じているかもしれません。あるいは、全く逆のことが起こっているのでは？と感じるかもしれません。だからこそ、忍耐を働かせるのです。逆のことが起こっているのではないかと感じる時にこそ、信仰が必要です。目に見えないことを信じるのが信仰ですから。信仰を十分に働かせて忍耐するのです。そうすれば、確かに報いがあります。

<sup>16</sup> 確かに、人間は自分より大いなるものにかけて誓います。そして、誓いはすべての論争を終わらせる保証となります。<sup>17</sup> そこで神は、約束の相続者たちに、ご自分の計画が変わらないことをさらにはっきり示そうと思い、誓いをもって保証されました。

創世記 22 章 16 節に、アブラハムに約束を確認された時に、主は、「わたしは自分にかけて誓う」と言われています。そこで、誓いというものがどのような性質のものなのかを、説明しています。

第一に、自分よりも偉大な存在に誓います。神にかけて、誓いますとか言いますね。第二に、誓いを立てると、反論も議論もみな、やめさせます。主にあって誓うと言えば、そうなのだと周りは受け入れるしかありません。しかし、問題があります。主なる神以上に、大いなる存在はいないのです。だから、主はご自分にかけて誓うしかなかったのです。そこまでして、約束を受け継ぐ者たちに、ご自分の計画が変わらないことをはっきり示されたのです。

それで、午前礼拝で見えてきました。徹底的に、聖書は、アブラハムへのこの約束がそのまま堅く立っていることを証しています。ヨシュアたちが約束の地に入った時もそうですし、ダビデに対して主が約束されたこと、彼の世継ぎの子から、神の国の王が立てられることも、すべてがアブラハムへの約束の成就なのです。そして、キリストが現れました。これが究極の子孫、この方によって、すべての国々の民が祝福を受けたのです。そしてこれからも、主が戻ってこられることによって、イスラエルの民が神に立ち返り、御霊が注がれて、救われるのです。そして、アブラハムに約束された地に、選びの民の帰還が完成して、そこに神の国が建てられます。世界中の人々がそこにやってきて、エルサレムにおられるイエス様のみことばを聞きに来るのです。

<sup>18</sup> それは、前に置かれている希望を捕まえようとして逃れて来た私たちが、約束と誓いという変わらない二つのものによって、力強い励ましを受けるためです。その二つについて、神が偽ることはあり得ません。

前に置かれている希望とは、キリストがおられること。そしてキリストが再び現れてくださることです。この希望が前に置かれているので、私たちは捕まえようとして逃れて来ている者たちです。私たちが主に礼拝を献げるのは、まさにこのことを行っています。もちろん、一人一人がキリストの希望を、それぞれの場で抱えています。しかし、共に集まることによって、キリストにある希望に、私たちは逃れるようにしてやってきているのです。賛美において、みことばにおいて、交わりにおいて、その希望の中に逃れています。「10:23-25 約束してくださった方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白し続けようではありませんか。また、愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか。ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合いましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。」

そして、この約束と誓いの二つのもので、私たちが力強い励ましを受けます。単なる、気休めの励ましではありません。力強い励ましです。そして、神にはできないものがあり、それは偽ることです。主は、偽ることはできない方なので、キリストが来られるのは確かなのです。そこで、次です。

## 2B 希望による守り 19-20

<sup>19</sup> 私たちが持っているこの希望は、安全で確かな、たましいの錨のようなものであり、また幕の内

側にまで入って行くものです。

私たちが、いかなる荒波があっても、それでも信仰から離れないでいられるのは、この安全で確かな錨があるからです。たましいというのは、とても大切です。私たちは、目に見えるところでは、いろいろなことを語り、また思いますが、大事なのはたましいです。ここが守られてこそ、思いや行いで、少し揺れがあっても、また戻って帰ることができます。たましいこそが、私たちが守るべき大事な部分ですが、それに錨となっている希望がついているのです。

そして、この希望によって、私たちは神のご臨在の深みへと入っていきます。幕の内側は、聖所、そして至聖所のことです。私たちはこれから、大祭司が聖所から至聖所に行く働きの深みへと入っていく内容を読んでいきます。パウロは、これを「神の栄光にあずかる望み」と言いました。「ロマ 5:2 このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。」

<sup>20</sup> イエスは、私たちのために先駆けとしてそこに入り、メルキゼデクの例に倣って、とこしえに大祭司となられたのです。

イエス様は、地上ではなく、天におけるまことの聖所に入られました。私たちの先駆けと言っていますから、私たちも入るのですが、それは神の御座そのものに近づくことです。私たちが、天に入れば、神の御座に近づくのですが、その前に主ご自身がここに入ってくださいました。

そして、「メルキゼデクの例に倣って、とこしえに大祭司となられた」と言っています。著者は、メルキゼデクのことを話したいと願って、小出しにしていますね。けれども、彼らが霊的に怠けていて、幼い状態でいて、前に向かって進んでいないことが分かったので、その部分を今、6章で戒め、また励ましていたのです。それで、メルキゼデクのことをようやく語ることができます。ここは、とても深い部分です。ユダヤ人たちにとって、「聖書には書かれていても、目に留めていなかった部分」と言ってよいでしょう。私たちにとっては、なおさらです。